

学校で育てる「つながる力」

教科指導のなかで行う人間関係づくり

上越教育大学教職大学院准教授

赤坂 真二
あかまか しんじ

つなげる場としての教科指導

学級がまとまらなくなった、子どもがなくなつたとの認識から、学級活動や道徳の時間に人間関係づくりの活動やスキルトレーニングの学習が行われるようになった。ここ数年來、実に様々な手法が教室に導入された。どれも有効性が確認され、それなりの成果を上げてきていると思う。しかし、一方で、それらを実施しさえすれば人間関係ができるのでは、という安易な認識が生まれてきているのではないかと危惧する。学級経営をしたことのある者ならば、週に一回程度、時間を設定して人間関係づくりをしたからといってそう簡単に子どもがつかないことを知っているだろう。

子どもに何かを身につけさせるには継続した指導が必要である。二十年近く小学校で学級担任をしてきた筆者から見ると、漢字や計算の力をつけることよりも人間関係をつくる方がはるかに難しい。人間関係づくりには、より継続した働きかけが必要である。

では、どうするか。子どもが学校で一番多くの時間を過ごしているのは言うまでもなく授業時間である。学校生活の六割から七割が授業である。その授業のなかで大半を占めるのが国語、算数などの教科指導の時間である。学級活動や道徳で人とかわる意欲を高めスキルを教えても、教科の時間になるとみんなが黒板の方を向いて、教師とだけやりとりしている授業では子どもはつながらないだろう。そこで、教科指導の時間に、意識的に

人間関係づくりをしていく。だからといって教科指導の時間に、ゲームやエクササイズをやるわけではない。それでは本来の教科の指導の時間が削られてしまう。多くの学校で校内研究のテーマとして「かわり合う」とか「学び合う」「伝え合う」といったことが掲げられるようになったが、子どもの相互作用を活かす学習活動を積極的に取り入れることで子ども同士の人間関係をつくっていくのである。

脱・一斉指導

「討論の授業」にあこがれて新採用のころから討論になるような教材を用意し発問を仕掛けてきた。教師が発問し、いくらかの個人思考の後、「どうぞ」と言う勢いよく子どもの手が挙がる。すると、いくつもの意見が黒板に並び、質問や反対などのやりとりの末、意見がしぼられ、論争が起こる。こんな授業が「もつともよい」と思っていた。しかし、「今日はよく子どもが発言したな」と思い、授業後に発言者を数えてみるとクラスの半分以下だった。クラスの人数にもよるだろうが、一単位時間に三十人以上に意味のある発言をさせることはいわゆる一斉指導ではかなり難しいのではないだろうかと思う。

付いた。発言した子どもは、質問や賛成、反対意見を通して他者とかかわっているだろう。しかし、それ以外の半数以上の子どもは、自分の口と言葉で意見を表出せず、人とかかわらずにただひたすら聞いているだけである。

そこで「ペア発言」を取り入れるようにした。方法は極めて簡単である。教師が発問をする。例えば「ごんぎつねのクライマックスはどこでしょう」。子どもは、教科書に線を引き、ノートにその部分を選んだ理由を記述する。隣同士が個人作業を終えると体を向けたり、机を合わせたりして発言を始める。ルールは次の四つ。①聞いていることを態度で示しながら聞く。②なるほどと思ったら頷く。③疑問に思ったら少し首を傾げる。④時間いっぱい話をする（同じ話を繰り返したり、質問したりする）。全員が慣れるまでには一か月以上かかる。しかし、全体の話し合いではなかなか自分から発言することがない子どもが生きて話をしている姿を目にするようになる。また、この後の声のかけ方を工夫することにより真剣に相手の話を聞くようになる。例えば、ペア発言の後に一人を指名し「隣の○○さんは、どんなことを言いましたか?」と聞く。するとそのときはうまく答えられなくても、次回からは相手の意見を再現できるくら

いに丁寧に聞こうとする。相手の話を真剣に聞くようになる。信頼関係がつくられてくることが期待できる。

授業にチーム体験を

子どもがかかり合う学習ならば、従来からグループ学習がなされてきた。全てがそうだとは言わないが従来のグループ学習は、学習用具の数が人数分ないからグループをつくったり、遅れがちの子どもへのフォローをするためなど管理目的でなされることがあり、人間関係をつくるためといった視点が足りない実践が見受けられた。個人でやっていたものを複数にすればかわりができるといえるものではない。グループ学習からチーム学習へと発想を転換させることが必要である。野球のチームと言うが野球のグループとは言わない。チームとグループは異なるものである。その最大の違いは何であろうか。私はその課題にあると思っている。チームとは野球やサッカーなどのスポーツにおいてよく使われる言葉である。勝利などの明確な目的に集団で向かうときに形成される。「二人では解決できない課題」を解決する集団がチームとなるのである。

いくつかの例を紹介する。

(1) 拡散のチーム活動①

班でできるだけ多くのアイディアを集めるチーム体験である。例えば社会科の時間に、一枚の写真を見せて「この写真からわかることを班で十個以上見つけよう」と指示をする。個人作業の後、四人グループで子ども①と指示をする。個人作業の後、四人グループで子ども①が例えばA、B、Cの三つを見つけたとする。以下、子ども②は、A、B、D、E、子ども③は、A、C、F、G、H、子ども④は、B、Iを見つけたとする。四人で意見を付き合わせ、重複したものを省けば、AからIの九個の意見が出る。そして、そのときに一つ足りないことに気付く、四人で十個目を探すこととなる。

(2) 収束のチーム活動①

複数のアイディアからもっとも適切なものを選ぶチーム体験である。例えば国語で、説明文の要約文を作成させる。個人作業の後、班で意見を集約し「班で出た意見のなかでもっともよく要約されているものを選ぼう」と指示をする。このときにルールを示す。①多数決やじゃんけんを使わずに話し合いで決めること。②全員が納得すること。③できるだけ時間を守る。これらのことを徹底しないと一部の子どもの意見で決まったり、よく話し合いが行われなかったりすることがあるからであ

る。また、時間内に終わらなかった班には、よく意見を出し合ったことを肯定的に評価するようにする。

これらの活動だけでもある程度はかわりが保証される。しかし、「今の話し合いで、なるほどと思ったのは誰のどんな意見ですか？」などと聞くことにより、互いの意見に対してより関心が向けられるようになり、活動に集中力が増す。すると、かわりも深まる。

(3) 再生過程の共有から創造過程の共有へ

チーム体験も、学級の成長に合わせて発展させることにより、関係性も成長する。最初は、ペア発言のように、自分の個人作業の後、自分の意見を相手に対して再生する活動を中心に据える。この段階では、相手の考えを復唱したり、相手の意見のよいところを伝えるなど、共感的なコミュニケーションを多く体験させる。こうすることにより子どもは、かわり合いながら学習することを楽しむようになる。次に、子どもの関係性が深まってきたら、互いにアイデアを出し合って、課題を解決する活動を体験させる。つまり、創造過程を共有させるのである。

例えば、国語で「一行詩をつくろう」と投げかける。

「好きな料理」をテーマに各自が一行詩を作る。作った

後は、班で発表させる（再生過程の共有）。子ども①が「焼き肉 服がくさくなる」、子ども②が「ラーメン なかでも豚骨最高」、子ども③が「お寿司 わさびは抜いてほしい」、子ども④が「カレーライス 今食べたい」を作ったとしたら、「四人の詩を組み合わせて一編の詩にしよう。順番やタイトルや最後の一言を工夫しよう」と指示をする。すると、次のような作品ができる。

夢の夕食

カレーライス 今食べたい

ラーメン なかでも豚骨最高

お寿司 わさびは抜いてほしい

焼き肉 服がくさくなる

こんな毎日来ないかな。

こうした作業過程では、「こつちの方が面白いよ」「だったらこうしよう」などの建設的な批判も起こる。受け入れるだけでなく、高め合うコミュニケーションが起るようになる。

かわり合いの基盤

いうまでもないことだが、かわらせれば「つながる」というとそうではない。「つながる」ということ

は、ただ、知り合いになることではない。また、一緒に作業ができる間柄になればいいというものではない。

互いの成長に寄与し合うようになることが「つながる」ということではないだろうか。活動はつながるためのきっかけである。その基盤をしっかりと育てていないと、これらの活動が空回りするだろう。かわり合う活動の基盤、それは「相手意識」である。ペア活動でもチーム体験でも、話をしっかりと聞く、意見を確実に伝えるなどの相手を意識した指導は必要であるが、活動だけで身につくものではない。

読者の学級では子どもが全体の前で発言するときにとこを見ているだろうか。学級全体を見ているだろうか。また、誰かが発言しているときに、その他の子どもは何をしているだろうか。誰を見ているだろうか。ノートを取りながら聞く子どもなどもいるから、全てが発言者に注目せよとは言わない。しかし、少なくとも耳を傾ける、体を向けるなど、意識を発言者に向けているような行動を示すよう指導すべきである。

発言のときだけではない、そのほかにも学習中に指導できることはたくさんある。プリントなどを渡すときに体を向け「どうぞ」と一声添える、受け取るときに「あ

りがとう」と両手でもらう。ノートを見てもらうときは、「お願いします」と言い、ノートを相手に向ける。立ち上がるときは、後ろの机に背もたれが強く当たらないように、また大きな音を立てないようにそとと立つ。消しゴムで消したら、消しかすを床にばらまかずティッシュに包んで捨てる。挙げればきりがながい、こうした世の中の人々が当たり前にやっていることを学習中にも徹底しているかどうかは相手意識の育成にはとても大事なのではないだろうか。

相手意識に対する指導者の細やかな気づきと粘り強い指導が、つながりをつくるための活動の質を高めるのである。教科指導の時間は、子どもがつながる機会が豊富にある。子どもがつながらなくなったと言われる今、ねらいだけでなく、そのねらいをどう達成したら子どもがつながるのかも視野に入れて授業を構想していくことが必要である。

【参考文献】

- (1) ジョージ・ジェイコブス、マイケル・パウワ、ロー・ワン・イン（著）、関田一彦（監訳）『先生のためのアイディアブック 協同学習の基本原則とテクニク』日本協同教育学会（発行）、ナカニシヤ出版（発売）、二〇〇五